

ぬいぐるみを用いた読書活動の促進効果と 子どものファンタジー傾向の関係

岡崎善弘 (岡山大学大学院 教育学研究科 講師) 浅川淳司 (金沢大学 人間社会研究域学校教育系 准教授)
大田紀子 (山口学芸大学 講師) 徳永智子 (岡山大学 教育学部 技術補佐員)
森口佑介 (京都大学大学院 教育学研究科 准教授)

要約

ぬいぐるみお泊まり会 (stuffed animal sleepover) は子どもの読書活動の促進を目的として国内外で広く行われているが、読書活動に関する効果の検証はこれまで行われてこなかった。本研究は、ぬいぐるみお泊まり会が子どもの読書活動を促進するのか検討した。本研究の結果から、ぬいぐるみお泊まり会に参加した子どもの自発的な読書は増加することが示された。さらに、ファンタジー傾向尺度を作成し、自発的な読書が増加した子どもと増加しなかった子ども間で比較した。ファンタジー傾向の下位因子は「役割遊び・ふり遊び傾向」、「空想の友達傾向 (見えない友達)」、「空想の友達傾向 (ぬいぐるみ)」と命名された。自発的な読書が増加した子どもの「役割遊び・ふり遊び傾向」は、増加しなかった子どもより有意に高かった。本研究の結果から、ぬいぐるみお泊まり会が読書活動に与える影響は、子どもの役割遊び・ふり遊び傾向の高さによって異なることが示唆された。

キーワード：ぬいぐるみ、読書活動、幼児、ファンタジー傾向

問題と目的

ぬいぐるみお泊まり会 (stuffed animal sleepover) がアメリカを中心に広がっている。図書館や本に関心を持ってもらうことを主な目的としており、「図書館に宿泊させたぬいぐるみたちが夜になると図書館内を探検した」というストーリーが子どもたちに紹介される。ぬいぐるみお泊まり会はアメリカのペンシルバニア州の公共図書館で始まったと言われている。2007年1月の新聞記事にぬいぐるみお泊まり会が紹介されており、「昨年の夏に行われていた公共図書館のプログラムからアイデアを得た」と記載されていることから (Pittsburgh Post-Gazette, 2007)、2006年頃にはすでに同様のプログラムがあったと思われる。日本では、国立国会図書館が2010年9月に「カレントアウェアネス・ポータル (注1)」でぬいぐるみお泊まり会を紹介しており、2010年12月に宝塚市立西図書館でぬいぐるみお泊まり会が開催されている。

読書リテラシーの育成を中心とした読書教育が2000年頃から政策として掲げられた影響もあり、読書の好意度や読書意欲を向上させる活動は家庭の外でも行われるようになった。例えば、「子ども読書年」となった2000年には、イギリスで行われているブックスタートが国内で広く紹介されている。ブックスタートとは、絵本を開いて楽しむ体験を赤ちゃんと保護者間で共有してもらう活動であり、市区町村自治体の活動として、0歳児検診などで実施されている (中村・南部, 2007)。ブックスタートの経験は、小学校入学後の生

活習慣や学力に影響する可能性が示唆されている。例えば、ブックスタートを乳児期に経験した子どもは、経験していない子どもより読書習慣が高く、ゲーム習慣が低いことが報告されていたり (森・谷出・乙部・竹内・高谷・中井, 2011)、読んだり書いたりする言語的な能力だけでなく、計算や図形認識といった数学的な能力に影響することも示唆されている (Wade & Moore, 1998)。子どもの頃の読書活動は、就学前だけでなく成人時の読書活動にも影響を与えることが報告されていることから、幼少期は読書習慣を形成する上で重要な時期と言える (国立青少年教育振興機構, 2012)。子どもの読書活動を促進させる上で、蔵書数や保護者自身が読書行動を示すことよりも、絵本を読み聞かせたり、図書館や本屋に連れて行ったりする方が読書に対する感情 (読書への好意度、読書意欲) に強く影響する (秋田, 1992)。ぬいぐるみお泊まり会は図書館で行われることが多く、絵本を読み聞かせてもらうこともぬいぐるみお泊まり会のプログラムの中に含まれているため、子どもの読書活動が促進される可能性は高い。

ぬいぐるみお泊まり会の実施方法は各図書館によって多少は異なっているが、一般的には、(1) ぬいぐるみと一緒に絵本のお話を聞いてもらい、(2) ぬいぐるみを預かり、(3) 閉館後にぬいぐるみが絵本を読んでいる場面の写真を撮影し、(4) 後日のぬいぐるみの返却と同時に、(3) で撮影した写真とぬいぐるみが読んでいた絵本を子どもたちに紹介する、という順番で実施されていることが多い。また、絵本を紹介する際、

大切にしているぬいぐるみが選んだ絵本であることが子どもに伝えられる。ぬいぐるみお泊まり会の重要な部分は、大切にしているぬいぐるみが絵本を選んでくれたという体験であり、この体験が読書活動の増加につながると期待されている。しかし、ぬいぐるみお泊まり会が子どもたちの読書活動の向上に貢献しているかどうかは検証されておらず、効果は明らかになっていない。そこで、本研究の第1の目的として、ぬいぐるみお泊まり会が子どもたちの読書活動を増加させるか検討する。

ぬいぐるみお泊まり会の参加対象は各図書館によって異なっており、幼児期の子どもが対象とされていたり、児童期の子どもが対象となっていたりする場合がある。ぬいぐるみが動くことは本来起こり得ないことであるため、参加した子どもが疑ってしまう場合には効果は期待できないであろう。このような空想と現実を区別する能力は、3歳頃から児童期後期にかけて発達することが報告されており (Samuels & Taylor, 1994; Taylor & Howell, 1973; Morison & Gardner, 1978; 富田・原, 2006)、幼児期の子どもの方が空想を現実として受け止めやすく、ぬいぐるみお泊まり会の世界観を受け入れやすいと思われる。空想や想像などのファンタジー傾向に個人差はあるが (Carrick, Rush, & Quas, 2013)、幼児期の子どもは空想遊びに没入して楽しむ傾向が強い時期であることも示唆されている (Singer & Singer, 1990)。したがって、ぬいぐるみお泊まり会に読書活動を促進する効果があるとなると、ファンタジー傾向の高さが読書活動の促進に関係していると予想される。そこで、本研究の第2の目的として、読書活動が増加した子どものファンタジー傾向は、読書活動が増加しなかった子どもより高いのか検討する。

研究1

ぬいぐるみお泊まり会では、ぬいぐるみが動き出すという非現実的なファンタジー要素を含む世界観が背景にあり、ファンタジーの世界を楽しむことができる子どもほど効果は高いと思われる。そこで、読書活動の促進が見られた子どもとそうでない子どもの間でファンタジー傾向の程度に違いがあるのか検討するための尺度を作成する。「ファンタジー」という用語は多様な意味を含んでいるが、発達心理学における研究においては、想像・ふり・夢など、個人的に作り出される虚構的な心的状態を指すケースと、サンタクロース・モンスター・魔法使いなど、非合理的な原理に基づいて作り出された存在の信念や思考を指すケースがある (富田, 2002; 森口, 2014)。ぬいぐるみお泊まり会では心的状態と信念のどちらも関係していることが予想されるため、心的状態と信念を包括したファンタジー傾向尺度を作成する。

方法

調査対象者

3つの幼稚園が本研究に参加した。幼稚園に子どもを通わせている保護者 (116名) に回答を依頼した。

ファンタジー傾向尺度

ファンタジー傾向尺度は、Taylor and Carlson (1997) で用いられた尺度を参考に作成した (15項目)。「子どものファンタジー世界に関するアンケート」として幼児の保護者に回答を求めた。アンケートは3つの幼稚園で実施された。子どものふり遊びや空想傾向の程度を「1:全然あてはまらない-7:非常にあてはまる」の7段階で回答を求めた。

結果と考察

ファンタジー傾向尺度

回答に不備があった5名の回答は除外し、111名の回答を分析対象とした。15項目の評定値について因子分析 (プロマックス回転) を行った。固有値の変化および因子の解釈可能性から、3因子を抽出した (表1)。各因子における高い因子負荷量を示した項目内容から、第1因子は「役割遊び・ふり遊び傾向」、第2因子は「空想の友達傾向 (見えない友達)」、第3因子は「空想の友達傾向 (ぬいぐるみ)」と解釈した。子どものファンタジー世界に関する研究を行っている3名が内容妥当性の観点から各因子の妥当性の高さを確認した。また、因子間の相関係数を求めた結果、第1因子と第2因子および第3因子の相関係数は.05以上であったが、各因子の因子負荷量は互いに異なった単純構造を示しているため、以降ではこれらの3因子に基づいて尺度を構成した。また、尺度の内的一貫性を調べるために、各因子の項目の信頼性 (α 係数) を求め、表1に併記した。各尺度の α 係数は .74 - .85 であり、内的整合性の観点から信頼性は高いと判断された。

研究2

本研究の第1の目的として、ぬいぐるみお泊まり会が子どもの読書活動を増加させるのか検討する。ぬいぐるみお泊まり会は、国内外で一般的に行われている手続きに準じて実施する。ただし、ぬいぐるみお泊まり会の世界観の説明を行わずにぬいぐるみを子どもから預かるだけでは、効果は期待できないと思われた。そこで、本研究では、子どもからぬいぐるみを預かる前に、ぬいぐるみお泊まり会の世界観を受け入れ易くするための導入として、魔法使いを登場させ、ぬいぐるみたちが魔法によって動き出す劇を見せる場面を設ける。

次に、本研究の第2の目的として、ぬいぐるみお泊

り会の効果の享受にはファンタジー傾向が関係しているのか検討する。ファンタジー傾向には個人差があり、ぬいぐるみお泊り会の後に読書活動が増加する子どもは、ファンタジー傾向が高い子どもであると予想される。そこで、読書活動が増加した子どものファンタジー傾向は、読書活動が増加しなかった子どもより高いのか検討する。

方 法

参加者

A 幼稚園に通う園児 42 名（平均月齢 65.2 ヶ月、月齢範囲 53 ヶ月～76 ヶ月、男児 27 名、女児 15 名）と B 幼稚園に通う園児 65 名（平均月齢 64.0 ヶ月、月齢範囲 53 ヶ月～76 ヶ月、男児 38 名、女児 27 名）が本研究に参加した。A 幼稚園が参加群として参加し、B 幼稚園は非参加群として参加した。事前に幼稚園教諭と保護者に調査内容を説明し、承認と同意を得た。

ファンタジー傾向尺度

ぬいぐるみお泊り会に参加する A 幼稚園の子どもの保護者（42 名）が自身の子どものファンタジー傾向（15 項目）について回答した。回答期間は、ぬいぐるみお泊り会の開催の 1 週間前だった。

読書活動の観察

ぬいぐるみお泊り会の効果を検証するために、ぬいぐるみお泊り会に参加する 1 週間前とぬいぐるみお泊り会に参加した翌日の 2 時点で子どもたちを観察した。観察は、子どもたちが幼稚園内で自由に行動できる時間帯（2 時間）を調査対象時間とした。本研究で

は、絵本を自発的に読むことを読書活動と定義し、読書活動をしていた子どもの人数を従属変数として調べた。さらに、ぬいぐるみと一緒に絵本を開いていたかどうかとも同時に調べた。また、A 幼稚園と B 幼稚園の行動観察は同じ時期に行われた。

ぬいぐるみお泊り会

ぬいぐるみ 子どもが大切にしているぬいぐるみをお泊り会に参加させることが一般的である。しかし、ぬいぐるみを所有している期間は子どもによって異なるため、ぬいぐるみに対する愛着の程度は異なることが予想された。そこで、ぬいぐるみお泊り会の約 1 ヶ月前に 13 体の新しいぬいぐるみを幼稚園に提供し、子どもたちに等しく愛着を形成させた。ぬいぐるみは実在する動物のぬいぐるみであった。ぬいぐるみに対して愛着をもってもらうために、幼稚園教諭が動物図鑑を利用して各ぬいぐるみの紹介を行い、ぬいぐるみたちは絵本から出てきたと伝えられた。現れた動物は前日に子どもたちに読み聞かせた絵本に登場した動物だった。参加する子ども全員が 13 体のぬいぐるみに愛着を持ったことを幼稚園教諭が判断できるまで、子どもたちはぬいぐるみを自由に触れることができた（例：幼稚園に着いたら直ちにぬいぐるみを探し始める、ぬいぐるみを持って移動する、ぬいぐるみのために食べ物のおもちゃを使って料理ごっこをはじめ等）。参加する子ども全員がぬいぐるみに愛着を持ったことが確認できるまでの日数は 20 日だった。

1 日目 書店見学として最寄りの書店へ行くことが事前に子どもたちに伝えられた（注 2）。最初に、書店内の会議室に集ってもらい、子どもたちに 1 冊の絵本の読み聞かせを行った。読み聞かせた絵本は、「ま

表 1：ファンタジー傾向尺度の因子パターン (n = 111)

項目	F1	F2	F3
第 I 因子 役割遊び・ふり遊び傾向 ($\alpha = .850$)			
お子さんは、動物や実際の人物のふりをして遊ぶことが多い	.780	.014	.012
お子さんは、誰かのまねをする	.762	-.070	-.247
お子さんは、ちよつとした作り話をすることがある	.735	.111	-.040
お子さんは、空想について実在するかのように話す	.580	.365	.016
お子さんは、ものに名前をつけて遊ぶことがある	.572	.090	.222
お子さんは、アニメや登場人物のふりをして遊ぶのが好き	.471	.093	-.060
第 II 因子 空想の友達傾向：見えない友達 ($\alpha = .838$)			
お子さんは、誰もいない場所に話しかけることがある	-.126	.862	.086
お子さんは、何もないところに手を伸ばす	-.005	.813	-.135
お子さんは、誰もいないところで笑いかけることがある	.249	.621	-.061
お子さんは、ものに話しかけることが多い	.241	.507	.213
お子さんは、ぼーっと空想にふけるのが好き	.326	.405	.017
第 III 因子 空想の友達傾向：ぬいぐるみ ($\alpha = .744$)			
お子さんは、ぬいぐるみや人形を外に行くときも持ち歩く	-.260	.060	.822
お子さんは、ぬいぐるみや人形のお世話をするのが好き	.335	-.295	.682
お子さんは、悲しいときやさみしいときにぬいぐるみをもつ	-.244	.315	.673
お子さんは、ごっこ遊び（お医者さんごっこ等）が好き	.396	-.220	.413
因子間相関			
I	-	.511	.525
II	-	-	.346

じょのマント」であった。読者に想像や空想を求める物語であることから、ぬいぐるみたちが探検する世界観に入り込みやすい絵本として選定された。「まじょのマント」を読み終えた後、魔法使いに会ってみたいかどうか、魔法使いたちはどのような魔法が使えると思うか尋ねた。次に、この書店は夜になるとぬいぐるみたちが遊びに来る書店であることを話し、ぬいぐるみたちが書店に来て遊んでいる様子の写真（45枚）をスライドで紹介した。さらに、幼稚園内のぬいぐるみたちも夜の書店で遊びたいと思っているかもしれないと伝えた。その後、幼稚園教諭が持ってきたカバンがごそごそしていると発言し、幼稚園にいるはずのぬいぐるみたち（13体）がカバンの中に入っていたことを子どもたちに目撃させた。ぬいぐるみはカバンの中から取り出され、子どもたちの前に一列で置かれた。次に、魔法使いが現れ、子どもたちと会話をした後、魔法使いは様々な手品を見せた。さらに、魔法でぬいぐるみが動く場面を目撃させた後、ぬいぐるみたちの声が聞こえると伝え、ぬいぐるみたちも子どもたちが読んでいるような絵本を読みたいという願望をもっていることが伝えられた。子どもたちにぬいぐるみを書店内に泊まらせても良いかどうかを確認し、許可を得た後、ぬいぐるみ（13体）を預かった。そして、夜になるとぬいぐるみたちは絵本を読むために書店へ行くかもしれないと伝えた。最後に、子どもたちにぬいぐるみに布団をかけてもらい、ぬいぐるみを迎えに来る日時を確認して、1日目を終了した。子どもたちは書店内を見学した後、幼稚園に戻った。子どもたちが幼稚園に戻った後、ぬいぐるみたちが書店内を探検している様子の写真を撮影した。

2日目 子どもたちは1日目と同じ会議室に集まった。ぬいぐるみたちが探検していた様子の写真（86枚）は、プロジェクターを介して紹介された。紹介された写真をつなげてストーリーを構成しており、ぬいぐる

みたちが書店内を探検し、絵本を子どもたちのために持って帰ってくるという内容だった。

結果と考察

ぬいぐるみお泊り会に参加する前・後で読書活動を行っていた人数の変化を図1に示す。ぬいぐるみお泊り会に参加する前では、読書活動をしていた子どもは5名だったが、ぬいぐるみお泊り会に参加した後では23名に増加していた。参加群において、ぬいぐるみお泊り会の前・後で読書活動を行っていた子どもとそうでない子どもの数の比率について χ^2 検定を行った結果、比率の偏りは有意であった（ $\chi^2(1) = 15.5, p < .01$ ）。非参加群において同様の検定を行った結果、比率の偏りは有意ではなかった（ $\chi^2(1) = 0.5, p > .01$ ）。さらに、参加群において、参加後に読書活動を行っていた子ども23名のうち、ぬいぐるみと一緒に読書活動をしていた子ども（図2）は23名中18名だった（4歳児：13名中12名；5歳児：10名中6名）（図3）。ぬいぐるみと一緒に読書活動をしていた子どもの人数が増加したかどうかを調べるために、フィッシャーの直接確率の検定を行った結果、比率の偏りは有意で



図2：ぬいぐるみお泊り会に参加した子どもの翌日の様子

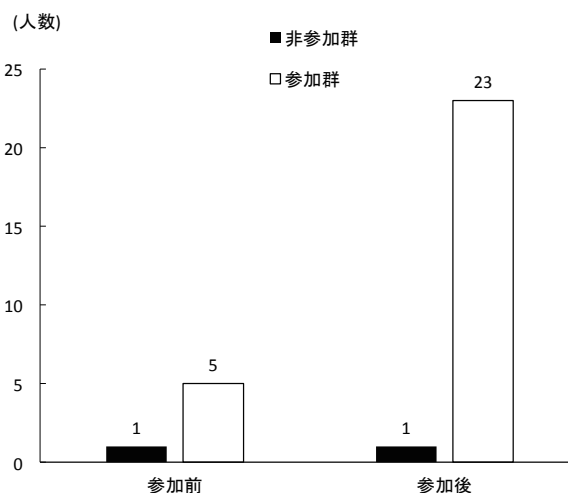


図1：ぬいぐるみお泊り会の参加前・後における子どもの読書活動

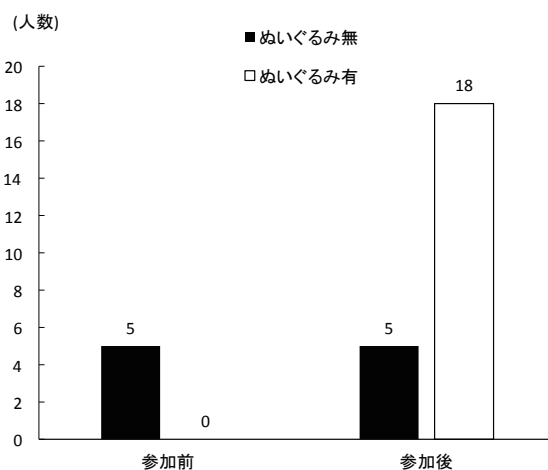


図3：ぬいぐるみお泊り会の参加前・後において読書活動中にぬいぐるみを所持していた参加群の子ども的人数

あった ($p < .05$)。本研究の結果から、ぬいぐるみお泊り会は、子どもの読書活動を増加させることを示唆した。また、ぬいぐるみと一緒に読書活動をする子どもが増えたことは、ファンタジーの世界に誘う手続きによって世界観を受け入れていたことを示唆していると思われる。

読書活動の増加とファンタジー傾向の関連

各因子の平均値を比較した結果を表2に示す。参加後において、読書活動をしていた子どもの役割遊び・ふり遊び傾向は、読書活動をしていなかった子どもより有意に高かった ($t(40) = 2.74, p < .01$)。空想の友達傾向（見えない友達）と空想の友達傾向（ぬいぐるみ）では、参加群と非参加群の平均値の差は有意ではなかった ($t(40) = 1.03; t(40) = 0.05, p > .05$)。以上の結果から、役割遊び・ふり遊び傾向の高さは、ぬいぐるみお泊り会参加後の読書活動の増加と関係していることが示唆された。

総合考察

本研究では、(1) ぬいぐるみお泊り会は子どもの読書活動を増加させるのか、(2) 読書活動が増加した子どもと増加しなかった子どものファンタジー傾向は異なるのか検討した。

ぬいぐるみお泊り会の効果

ぬいぐるみお泊り会の効果はこれまで検討されていなかったが、本研究の結果から、ぬいぐるみお泊り会に参加した子どもの読書活動は増加することが示唆された。ぬいぐるみお泊り会に参加した後、自発的に絵本を開く子どもが増えたことから、ぬいぐるみお泊り会は、読み聞かせによる受動的な読書から自発的な読書へとつなげる橋渡しとして活用することができるだろう。児童期になると、子どもはひとりで本を読むことが求められるようになるため、幼児期に絵本を読み聞かせてもらうだけでは、児童期初期の読書環境の変化に対する負担感は大きいと予想される。ぬいぐるみお泊り会に参加した後、子どもは自発的に絵本を開くようになることが継続するのであれば、ぬいぐるみお泊り会は、自発的に本を開く契機を提供するだけでな

く、児童期初期の読書環境の変化に伴う負担感を軽減させる取り組みとして期待することができるだろう。ただし、本研究における読書活動の調査は幼稚園内だけであり、各子どもの家庭内における読書活動については調査できなかった。読書活動の促進は幼稚園内に限定されている可能性があるため、今後の研究では、家庭における効果も含めて検討する必要がある。

さらに、ぬいぐるみが動き出すことは本来あり得ないため、ぬいぐるみお泊り会の効果はファンタジー的な思考を有する幼児期に限られると思われる。例えば、物理的法則に反する手品を子どもに見せた際、4歳児は魔法であると答える傾向が高いのに対して、8歳児ではだまされたと答える傾向が高い (Phelps & Woolley, 1994; 富田, 2009)。ぬいぐるみお泊り会で起こる出来事も日常的な出来事と異なるため、8歳児以上の子どもには受け入れられない可能性がある。

ぬいぐるみお泊り会の世界観に子どもを誘う方法

国内外で広く行われているぬいぐるみお泊り会では、絵本を読み聞かせた後、子どもたちからぬいぐるみを預かる手続きが一般的である。このような従来の手続きでは、ぬいぐるみたちが夜になると動き出すかもしれないというぬいぐるみお泊り会の世界観を子どもたちは理解できていない可能性があった。そこで、本研究では、絵本を読み聞かせた後、ぬいぐるみたちが動き出す様子を子どもたちに目撃させた。ぬいぐるみお泊り会に参加した後、子どもたちが絵本を開く際にぬいぐるみを同伴させたことは、ぬいぐるみお泊り会の世界観を子どもたちが理解し、受け入れたことを意味する。ぬいぐるみと一緒に絵本を開く子どもが増加した背景には、ファンタジー的世界に誘うための絵本の読み聞かせだけでなく、ぬいぐるみが夜に動くかもしれないことを期待させる劇の効果もあったと考えられる。ぬいぐるみお泊り会の世界観を子どもたちが受け入れ易くするための劇等は、ぬいぐるみお泊り会の効果を促進する1つの方法として有効であろう。ただし、本研究で実施したような具体的な演出を含む劇は、ファンタジー傾向が高くない子どもの空想を助ける可能性がある一方で、子どもの自由な空想を制限する可能性がある。子どもの空想の余地を狭めてしまう可能性も含むため、劇等の具体的な演出を行う際は、参加する子どもに応じて演出内容を調整する必要があるだろう。今後の研究では、豊富に空想が可能となる効果的な実施手続きについて検討する必要がある。

読書活動の促進とファンタジー傾向

幼児期はファンタジーや想像の世界に入り込んで素直に楽しむことができる時期である (e.g., Woolley, Boerger, & Markman, 2004)。幼児期の子どもたちは、

表2：ぬいぐるみお泊り会参加後の読書活動の有無とファンタジー傾向尺度の平均値 (SD)

ファンタジー傾向	読書活動なし (n = 19)		読書活動あり (n = 23)	
役割・ふり遊び傾向	22.7	(10.0)	29.8	(6.0)
空想の友達傾向: 見えない友達	13.1	(6.8)	15.4	(6.3)
空想の友達傾向: ぬいぐるみ	16.0	(5.6)	15.9	(5.6)

<: 有意な差を示す ($p < .05$)

空想世界の出来事は現実世界でも起きると考える傾向にあるため、ぬいぐるみが絵本を選んでくれたことを疑いにくい。しかし、ファンタジーの世界に入り込む程度は幼児期であっても個人差があるため (Carrick, Rush, & Quas, 2013)、ぬいぐるみお泊り会が子どもに与えた効果においても個人差が影響したと思われる。実際に、本研究では、ファンタジー傾向尺度の下位因子である役割遊び・ふり遊び傾向の高さがぬいぐるみお泊り会の効果と関連していた。役割遊びでは、自分とは異なる他者の視点に立ち、他者の感情を考えたり他者の行動を考えたりすることが必要と考えられおり (小川・高橋, 2012)、役割遊びは心の理論の発達と関係していることが示唆されている (e.g., Harris, 2000; Lillard, 2001)。以上のことから、ぬいぐるみお泊り会による読書活動の促進の背景には、ファンタジー傾向の他に、心の理論の発達に関係している可能性がある。また、読書活動の促進は、役割遊び・ふり遊びのバリエーションが単に1つ増えた結果として解釈することもできる。幼児期は、役割遊び・ふり遊びを行い始める時期であり、日頃から役割遊び・ふり遊びを頻繁に行っている子どもがぬいぐるみお泊り会を再現したとも考えられる。しかしながら、本研究では心の理論の発達状況や子どもの役割遊び・ふり遊びの頻度については調査していないため、上記の2つの仮説のどちらが支持されるのか、今後の研究としてさらに検討する必要がある。

〈文献〉

- 秋田喜代美 (1992) . 小中学生の読書行動に家庭環境が及ぼす影響. 発達心理学研究, 3, 90-99.
- Carrick, N., Rush, E., & Quas, J. A. (2013) . Suggestibility and imagination in early childhood. In M. Taylor (Ed.) , The oxford handbook of the development of imagination (pp. 113-125) . New York: Oxford University Press.
- Harris, P. L. (2000) . The work of the imagination. Oxford: Blackwell.
- 国立青少年教育振興機構 (2012) . 子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究報告書 国立青少年教育振興機構 2012 年 2 月 23 日 <http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/72/> (2015 年 5 月 1 日)
- Lillard, A. (2001) . Pretend play as twin earth: A social-cognitive analysis. Developmental Review, 21, 495-531.
- 文部科学省 (2006) . 読解力向上に関する指導資料: PISA 調査 (読解力) の結果分析と改善の方向. 東洋館出版社.
- 森口佑介. (2014) . 空想の友達: 生成メカニズムと子どもの特徴. 心理学評論, 57, 529-539.
- Morison, P., & Gardner, H. (1978) . Dragons and dinosaurs: The child's capacity to differentiate fantasy from reality. Child Development, 49, 642-648.
- 森 俊之・谷出千代子・乙部貴幸・竹内恵子・高谷理恵子・中井昭夫. (2011) . ブックスタート経験の有無が子どもの生活習慣や読書環境等に及ぼす影響. 仁愛大学研究紀要人間学部篇, 10, 61-67.
- 中村仁美・南部志緒. (2007) . ブックスタートの実態調査と効果的な実施方法についての検討. 日本図書館情報学会誌, 53, 75-89.
- 小川真人・高橋 登. (2012) . 幼児の役割遊び・ふり遊びと「心の理論」の関連. 発達心理学研究, 23, 85-94.
- Phelps, K. E., & Woolley, J. D. (1994) . The form and function of young children's magical beliefs. Developmental Psychology, 30,

385-394.

- Pittsburgh Post-Gazette (2007) . Tracking what happens when stuffed animals sleep over. (January 25, 2007)
- Samuels, A., & Taylor, M. (1994) . Children's ability to distinguish fantasy events from real - life events. British Journal of Developmental Psychology, 12, 417-427.
- Singer, D. G., & Singer, J. L. (1990) . The house of make believe. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 須藤 文・安永 悟. (2009) . LTD 話し合い学習法を活用した授業実践の試み: 小学 5 年生国語科への適用. 協同と教育, 5, 12-22.
- 須藤 文・安永 悟. (2011) . 読解リテラシーを育成する LTD 話し合い学習法の実践. 教育心理学研究, 59, 474-487.
- Taylor, M., & Carlson, S. M. (1997) . The relation between individual differences in fantasy and theory of mind. Child development, 68, 436-455.
- Taylor, B. J., & Howell, R. J. (1973) . The ability of three-, four-, and five-year-old children to distinguish fantasy from reality. The Journal of Genetic Psychology, 121, 315-318.
- 富田昌平. (2002) . 実在か非実在か: 空想の存在に対する幼児・児童の認識. 発達心理学研究, 13, 122-135.
- 富田昌平. (2009) . 幼児期における不思議を楽しむ心の発達: 手品に対する反応の分析から. 発達心理学研究, 20, 86-95.
- 富田昌平・原 充代. (2006) . 幼児における空想と現実の区別の認識. 幼年教育研究年報, 28, 51-59.
- Wade B. & Moore, M. (1998) . An early start with books: literacy and mathematical evidence from a longitudinal study. Educational Review, 50, 135-145.
- Woolley, J. D., Boerger, E. A., & Markman, A. B. (2004) . A visit from the Candy Witch: Factors influencing young children's belief in a novel fantastical being. Developmental science, 7, 456-468.

〈注〉

- 1) 「カレントアウェアネス」(Current Awareness) は、図書館や図書館情報学に関する最新の動向を紹介・解説する国立国会図書館の情報誌であり、2006 年からウェブサイト「カレントアウェアネス・ポータル」を開設している (<http://current.ndl.go.jp/>)。
- 2) 海外のぬいぐるみお泊り会は図書館や書店で実施されている。国内のぬいぐるみお泊り会の開催場所の多くは図書館であるが、書店でも開催され始めている。

〈謝辞〉

日本科学協会の笹川科学研究助成を受けて本研究を実施致しました。助成して頂いたことに深く御礼申し上げます。本研究全体に渡ってご支援とご協力を頂いた紀伊國屋書店の長嶋慧史様、火口徹也様、岡山中央幼稚園の山本智子様、森下順子様、石原美樹様、山田理絵様、福家扶美子様、深く感謝申し上げます。さらに、ぬいぐるみお泊り会の企画・準備・運営を手伝って下さった岡山大学教育学部養護教諭養成課程の松岡優希様、木山好様、山崎絵里香様、細田瑞貴様、堅木貴恵様、梅谷育美様、川上友葵様、岡山大学教育学部教育心理学専修の団迫詩織様、前田幸夫様、末藤優美様、小谷宗様、妹尾宜和様、長尾文音様に心より感謝致します。最後に、ぬいぐるみお泊り会を初めて企画したペンシルベニア州の公立図書館の皆様へ深く感謝申し上げます。